# 朝日新聞襲撃から 32 年

今日 5 月 3 日は「憲法記念の日」である。昨年は大阪市立中央図書館から兵庫県西宮市の朝日新聞阪神支局に向かい、あの事件の現場「朝日新聞襲撃事件資料室」を訪ねた。資料室に展示された命を奪われた小尻知博記者の写真、母みよ子さんの「憲法記念日にペンを折られし息子の忌」という句を見て、目頭があつくなった。今年も行きたかったが、原稿に追われ断念した。せめて昨日 2 日の朝日新聞社説、危うい「反日」の氾濫を紹介しておきたい。

兵庫県西宮市の朝日新聞阪神支局が散弾銃を持った男に襲われ、記者 2 人が殺傷された事件から、あすで 32 年になる。命を奪われた小尻知博記者(当時 29)がよく訪れていた喫茶店が、隣の尼崎にあった。在日コリアン 2 世の金成日さん(67)が事件の 6 年前、29 歳の時に開き、差別への抗議や環境問題などに取り組む地域の市民が集っていた。金さんは、当時の外国人登録制度で義務づけられていた指紋押捺を「植民地支配のあとも続く民族差別政策」として拒み続け、1986 年 11 月、逮捕される。警察署内で警官に体を押さえられ、腕と指を固定する器具で強引に指紋をとられた。「反日」「不逞鮮人」。金さんの自宅や店に匿名の電話が相次ぎ、偽名の手紙も届いた。釈放された金さんに取材し、指紋押捺について問題提起する記事を書いたのが小尻記者だった。

「反日」は、その半年後に起きた阪神支局襲撃をはじめ、一連の警察庁指定 116 号事件で繰り返し登場する。「赤報隊」を名乗る犯行声明文には「反日分子には極刑あるのみ」(阪神支局襲撃)「反日朝日は　50 年前にかえれ」(名古屋本社寮襲撃)などと記されていた。その言葉はいま、インターネットやマスメディアに氾濫している。政治家から一般の人々までが、名前や顔も公開しながら発し、テーマも隣国との外交問題から身の回りの生活課題にまで及ぶ。3 年前、待機児童対策の遅れを「保育園落ちた日本死ぬ」と批判したネットへの投稿が「反日」非難を浴びたことは記憶に新しい。

「反日」とは何か。「日」は社会か、時の政権か。「反」するとはどんな言動を指すのか。そうした点があいまいなまま、安易にレッテルを貼り、発言自体を封じ込め、排除しようとする危うさを「反日」ははらむ。「日本死ぬ」には一方で「表現が乱暴」といった批判が出たが、そうした意見のやりとりとは異質の「攻撃」がもつ危うさとも言える。「赤報隊がのぞむ方向へと世の中が変わってきた気がする」と金さんは話す。「非国民」という言葉のもとで、言論の自由が失われていった戦前の歴史を思えば、金さんの危惧もあながち杞憂とは言いきれまい。金さんは昨秋に店を閉じたが、今年もあす、地元で小尻記者の追悼行事を開く。国籍やルーツ、思想・信条などの違いを超えて、一人ひとりが互いに相手の考えを尊重しつつ、意見を交わす。日本国憲法が目指すそうした社会を、市民とともに作っていく。報道機関としての決意を新たにする。

(2019年5月3日)